

# CSR 報告書のあり方

## ～CSR 報告書の有用性を高めるために～

1130426 岡林 彩

高知工科大学マネジメント学部

### はじめに

大学3年の夏、東日本大震災の義援金集めのタオル企画販売を行い、その時に CSR を知った。また、就職活動(企業研究をしたり、会社説明会に参加した)をしていくなかで、CSR をアピールする企業が目立ったように感じた。CSR を利益追求の一手段として利用したり、企業のイメージアップに活用したりと、本質的な CSR から外れてきているように思う。本質的な CSR を理解したいと思ったのがテーマ選定の動機である。

企業規模が大きいほど CSR に対する取り組み度は高く企業規模が小さいほど取り組み度は低い。また、CSR の本来の目的から外れて、利益追求の一手段や企業のイメージアップに利用されているケースがある。この現状は、CSR の定義が不明確なため CSR 報告書が企業の都合のいいように作成出来ることに原因がある。本研究は、まず、CSR の概念と各国の CSR、代表的な CSR の考え方を整理し、そこから CSR の質について提示する。そして、CSR 報告書を2社取り上げ、どの程度信憑性があるものかをランク分けしてみた。そこから CSR 報告書の問題点を明らかにし、更にその解決策を提示する。

### 1. CSR の概要

CSR は、「企業の社会的責任」である。CSR 活動の定義はさまざまだが、本論では、「自然環境及び社会のサステナビリティを高め、自然環境と社会との共生を図ること」(引用：松本恒雄 [2008]『新版 サステナビリティ CSR 検定』中央経済社)に基づき以下の検討を行う。

CSR の背景には4つの議論①急速な経済のグローバル化と情報化により先進国と発展途上国の貧富の差が拡大したこと②企業不祥事の続出により、企業倫理や社会責任を認識することになったこと③公的機関が担ってきた役割が、政府・自治体では担いきれず、社会的影響力のある企業にその役割が求められるようになったこと④企業と社会のあり方が CSR として見直されていること、が挙げられる。そして CSR はメセナ活動、企業倫理、環境経営から発展していったという見方がある。

また CSR の構造は下図の様に、法的責任、倫理的責任、経済的責任、社会貢献的責任、この4つのレベルの責任に分けることが出来、これらをレベルアップしつつ果たしていくこと、また網羅的に果たしていくことが CSR として求められている。

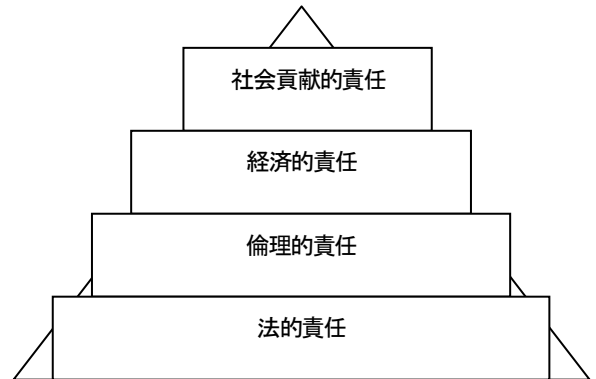


図1 CSRの構造

### 2. 各国の CSR の状況

日本の CSR は、環境経営、フィランソロピー、コンプライアンス経営、といった3つの軸で進められ普及し、企業の不祥事、労働安全衛生、遵守精神、環境問題が中心である。

アメリカでは、エンロン事件やデータコム事件などの経済事件を受け、株主価値中心、利益最優先の土壌から、企業が社会に対し果たすべき社会貢献活動(地域貢献や寄付行為)に発展した。企業の不正、人種の多様性、社会貢献、労働対策、などが中心である。

更にヨーロッパでは、環境・社会・経済のトリプルボトムラインと言われる3本柱でとらえている。失業率が高いことや、グローバル化によって起きている児童労働問題が CSR を後押しした。そのため環境問題に加え労働問題が中心となっている。

アジア・アフリカの CSR は貧困問題、児童労働、強制労働、腐敗問題などが CSR 活動の中心である。貧困問題の解決として、金銭提供だけでなく、社会インフラの整備に貢献している。これにより児童労働や強制労働などの労働条件も緩和されている。

上記の様に国によって問題になっていることや、社会の求めていることは異なり、CSR の内容も各国様々である。しかしそうした中でも、多くの企業が GRI ガイドラインを CSR 報告書作成の指標としている。GRI ガイドラインは、CSR 報告書のデファクトスタンダードであり①ビジョンと戦略②組織の概要③統治構造とマネジメントシステム④GRI ガイドライン対照表⑤パフォーマンス指標といった5項目から構成され、更にパフォーマンス指標は、「経済的パフォーマンス」「環境パフォーマンス」「社会的パフォーマンス」の3種類からなり、必須指標と任意指標に分かれている。この GRI ガイ

ドラインの項目をある程度網羅しておく、企業はステークホルダーからの信頼性を獲得できるメリットがある。

### 3. CSR の考え方と CSR の本質

ここでは、ドラッカーと、マイケルポーターの CSR の見解を考察する。ドラッカーは、社会自体の問題については、組織は社会環境の中においてのみ存在し、社会自体の問題の影響を受けざるをえないため社会的責任に取り組まなければならないとしている。つまり社会の健康はマネジメントにとって必要だから健全な組織は、不健全な社会では機能しえないという考えである。一方、マイケルポーターは、「経済成長の追及」と「社会に果たすべき責任」これら二つのバランスを保ち、社会から必要とされる存在とならなければ企業価値を高め持続的発展を遂げることは出来ないとしている。事業活動を通じた社会への貢献を目的に掲げて行動すれば、収益はその結果としてついてくるという考え方である。

上記を参考に、現代社会で主流となっている CSR の質について提示するなら、今の企業は、マイケルポーターの考え方に同調的と言える。どう企業を良く見せるか、そこに戦略を投入する方向にある。経営戦略の流れは理解出来るが、それは果たして「本来あるべき CSR」と相反するのではないのか、ここに疑問を感じる。CSR の本質は、ドラッカーのいう「自らの活動とは関わりなく、社会自体の問題として生じる問題について、組織は社会環境の中においてのみ存在し、社会自体の問題の影響を受けざるをえないため社会的責任に取り組まないといけない」というところにあるべきだ。

### 4. 仮説に基づいての事例分析

CSR がその本質から外れているという現状は、CSR の定義の不明確さや CSR 報告書が企業の都合のいいように作成出来ることが原因と考えられる。ここでは、2社の CSR 報告書を取り上げ、根拠のある記述、根拠のない記述を自分なりにランク分け（A:信憑性があり、B:信憑性がある、C:信憑性に欠ける）し、分析する。

A社は、15項目中、Aが7個、Bが2個、Cが6個となり、K社は18項目中、Aが6個、Bが4個、Cが8個となった。

その分析から、数値で検証できるもの（定量情報）より記述説明（定性情報）が多く、客観的に判断の難しいものが多いことが指摘できた。定性的なものは、定量的なものに対して主観が入り易く、客観的な線引きが出来ない。また内容によっては事実記述ではなく、姿勢や方向性を述べたものも散見され、その内容は検証可能なものとは言い難い。CSR 報告書の情報を受け取る側にとって、検証の様式がない。この状況はいわゆる「言った者勝ち」状態であると言っても過言ではない。こうした CSR 報告書の公表の下では、情報の受け手たる、報告書の読み手はこれを意思決定の指標とすることは出来ない。このことは、CSR 報告書が社会により浸透し活用されていくことの妨げにもなっている。

### 5. CSR の本質追求と報告書改善の提示

二つの解決策を提示する。

一つ目に信憑性を上げること。定性的な記述は、客観的な評価よ

り主観的な評価になりがちである。定量的な記述を目指し、信憑性をあげることを目指すべきである。

二つ目には、企業間の CSR 報告書の比較可能性確保である。現在 GRI ガイドラインを使って各社 CSR 報告書を作っている。GRI ガイドラインは、非常に標準化された書類、項目として利用度は高いが GRI ガイドラインのどの項目を使うかは企業によってバラバラであり、結局作られたものは企業間で比較できるものとなっていない。環境パフォーマンス指標の中に「水」という項目がある。「水の総使用量」は必須項目だが、「水のリサイクル量及び再利用の総量」は任意項目である。水の総使用量とリサイクル及び再利用の割合を比較して、はじめて CSR 活動の価値を表現できる。現在の任意項目を必須項目に変えることで、報告書はより有効になる。完全一致は難しいが、「GRI ガイドラインの最低この項目はどの企業も使う」といった業種別の決まりを作るなどして、比較可能性を確保するべきだ。つまり企業間で比較が出来るよう、CSR 報告書の雛形作成をある程度業界ごとに進めることが必要である。また作られた CSR 報告書を、誰が測定し誰が評価するのか、そういった公的監査も設けるべきだと考える。

### おわりに

本研究では CSR 報告書を分析し、CSR 報告書のあり方を提案した。しかしこれらを実践し、かつ有用なものにしていくためには、各企業で CSR 報告書を作成する担当者や CSR 活動を推進する部署の担当者が、CSR の本質を理解することが大切だと感じた。

私の内定先の企業も、CSR 活動に取り組んでおり、私自身、企業の一員として CSR 活動に参加する機会があるだろう。その時、持続可能な社会を願って、企業の社会的責任を果たしたい。また、社会問題の解決を企業に押し付けるのではなく、個人レベルでも取り組むべきだとも思う。エコバックを持参するなど、日常の中で、少しでも環境に良い行動ができるように心掛ける等にも取り組みたい。

### 参考文献・引用文献

岡本享二〔2008〕

『進化する CSR「企業責任」論を超えた〈変革〉への視点』JIMP ソリューション

米山秀隆〔2004〕

『図解よくわかる CSR(企業の社会的責任)』日刊工業新聞社 倍和博〔2009〕

『CSR マネジメントコントロール 企業と社会をつなぐ3つの仕組み』麗澤大学出版会

P.F. ドラッカー〔2001〕

『マネジメント【エッセンシャル版】—基本と原則』ダイヤモンド社

松本恒雄〔2008〕『新版 サステナビリティ CSR 検定』中央経済社